



すぎ七

杉並区立杉並第七小学校

校長 齋藤 瑞穂

TEL 3392-6328

FAX 3393-7536

令和元年11月1日 No.505

ウィルチェアラグビー観戦記

校長 齋藤 瑞穂

10月18日、4学年の児童と、車椅子ラグビーワールドチャレンジ 2019 フランス対ブラジルの試合を観戦してきました。

折しもラグビーワールドカップでは日本代表チームがグループリーグを全勝で勝ち抜き、見事史上初のベスト8進出を決めて、日本中のラグビー熱がこれまでになく高まっているところでした。とは言え、「車椅子ラグビー」は、子供たちにはほとんど未知のスポーツです。あの体と体が激しくぶつかり合うゲームを、車椅子に乗ってどのように戦うのか——杉七タイムでは、「みんなつながるやさしい町」をテーマに、これまでも障害や福祉について学んでいる4年生ですが、実際に国際的な障害者スポーツ大会を観るのは初めてのこと。ふだん慣れ親しんでいるサッカーや野球のように観戦を楽しめるのか、子供たちは期待と不安が半々だったと思います。

しかし、心配は無用でした。会場に着くと、フランスとブラジルの代表選手が、まさに車椅子で入場しようとするところでした。専用に作られた車椅子を器用に操り、笑顔で入場する選手たち。子供たちは、そんな選手たちの体のどこか一部分が失われていたり形が異なっていたりする様子に、一瞬目を見張るものの、場内を盛り上げる実況DJの巧みなリードもあって、試合開始とともに、あっという間に試合に引き込まれていったのです。

車椅子同士が音を立ててぶつかり合い、ホイールがかみ合って動けなくなったりタイヤがパンク

したりするのは当たり前。その大迫力もさることながら、さらにそれをサポートスタッフがまるでF1のピットのように瞬時に解決するのも驚きました。持ち時間を使ってトライまでボールをキープする駆け引きは、サッカーなどでもおなじみの光景です。子供たちは自然にフランス応援組とブラジル応援組に分かれ、大きな声援と手拍子・足拍子を送ります。

試合に夢中になっている間、おそらく子供たちは純粋にゲームを楽しみ、それをプレーする人たちが障害をもっていることなどすっかり忘れていたことでしょう。フランスの勝利で試合が終わり、帰途につく頃には、子供たちはすっかり車椅子ラグビーのファンになったようでした。



「失われたものを数えるな 残された機能を最大限に生かせ」——障害者スポーツの理念を表した言葉です。選手たちは自身の障害と向き合い、自分がもてる力を最大限に発揮してプレーしていました。その美しくたくましく、堂々とした姿から、また一つ、子供たちは大きな学びを得たこととでしょう。

東京2020パラリンピックがいよいよ楽しみになってきました。

90周年をむかえて

11月16日に、創立90周年を祝う記念式典が行われます。式典には、学校を代表して5、6年生が出席し、よろこびの言葉を発表します。また6年生は、杉七小の伝統ともいえる、「杉七太鼓」も披露する予定です。先日は式本番に向けて、講師の先生をお招きし、太鼓の演奏を指導していただきました。

